

第15回『SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』（オンライン）

——スポーツの価値を再考する——

【第3回】

テーマ：「ラグビーの特性から浮かび上がるスポーツの価値」とは

講師：高崎利明氏（京都市立京都奏和高校校長 元京都伏見工業高校ラグビー部監督）

村上晃一氏（ラグビージャーナリスト）

司会：平尾剛氏（神戸親和女子大学教授 ラグビー元日本代表）

日時：2021年10月16日（土）19:00～20:30

会場：Zoom ウェビナー



『第15回 SCIX スポーツ・インテリジェンス講座』も既に2回を終了し、今期最後となる本講座。ラストを飾る今回のテーマは「ラグビーの“特性”から浮かび上がる“スポーツの価値”とは」。ラグビーの競技特性と言うと、「One for all. All for one（みんなは1人のために、1人はみんなのため

に）」という言葉で表現されます。1チーム15人の選手たちが、激しい肉弾戦をいとわず、自らを犠牲にしてチームの勝利のためにハードワークするといったラグビーの犠牲的精神がよく語られることは、皆さんもご存じのことと思います。またゲームが終わった瞬間には、敵も味方もなくなるという「ノーサイド精神」もよく知られているところでしょう。ですが、実際のところ、ラグビーのスポーツとしての価値は、もっと多岐に渡っているのではないかと人間形成を目的とした教育的価値は、もっと幅広いものがあるのではないかとという観点から、いわゆる「ラグビー精神」の中に、どんなスポーツの価値が秘められているのだろう？ということ今回改めて議論しました。

「ラグビーの“特性”から浮かび上がる“スポーツの価値”とは」について議論していただいたお二人の講師は、京都市立京都奏和（そうわ）高等学校の校長に就任された高崎利明氏と、昨年もこの講座にご出演いただきましたラグビージャーナリストの村上晃一氏。司会を務めていただいたのは前回同様、神戸親和女子大学教授であり、ラグビー元日本代表の平尾剛氏。今回もオンラインによる本講座、平尾氏と村上氏は神戸国際会館のセミナーハウスにお越しいただき、高崎氏には京都奏和高校の校長室からご出演いただいていたの開催となりました。

はじめに平尾氏より高崎氏の経歴を紹介。京都伏見工業高校（現京都工学院高校）ラグビー部3年時に、SCIX初代理事長の平尾誠二氏とハーフ団を組み、伏見工業高校を初の高校日本一に導いた名スクラムハーフ。その当時の監督が、のちにTVドラマの「スクールウォーズ」の「泣き虫先生」として日



本中に知られることになる高校ラグビー界の名将・山口良治氏であることは、ラグビーファンであればご存知のことでしょう。その恩師・山口良治氏からの誘いで、母校・伏見工業高校に体育教諭として戻り、ラグビー部の指導に携わり、山口氏の後任として監督になられた3年目の2000年には、花園の全国大会で初優勝され、その後も3度の高校日本一を経験されるなど、高崎氏自身も高校ラグビー界を代表する名将の一人。今回の講座では、そうした高校ラグビーの指導者としての立場から「ラグビーの“特性”から浮かび上がる“スポーツの価値”とは」について高崎氏には語っていただきました。

まずは、10月23日（土）のオーストラリア代表戦から始まる日本代表の秋のテストマッチ4試合のメンバーには、高崎氏の教え子でもある松田力也選手（埼玉パナソニックワイルドナイツ）が選出されていることから、松田選手の印象についてうかがいました。「学生時代から体も大きくて、小中学時代から活躍していた。お父さんもラグビーをやっていたので彼のことはよく知っていた。ただ、代表になれるほど能力が高いかというと体育の授業を見ていると、そこまで高くはなかったが、自分で夢を持って、努力をしてきた成果だと思う。帝京大学に行って成長した部分も大きい。足もそんなに速くないし、突出して特別な能力があったわけではない。それでも代表で活躍できるのは努力だと思う」と、松田選手の努力を称え、さらにこう続けます。

「努力をしなくても出来る子はいる。でも、そういう子はどこかでつまずいてやらなくなる。努力してずっとできるかというのが大事。そして、それを見出せる大人がいるかが大事」。

また、来年1月7日（金）に開幕する「JAPAN RUGBY LEAGUE ONE」のDiv. 1の12チームの中心メンバーの中にも、高崎氏の教え子が数多い。今季、チーム再建を乞われて横浜キヤノンイーグルスから NEC グリーンロケッツ東葛に移籍したスクラムハーフの田中史朗選手もその一人。田中選手は体も小さく、まさしく努力して代表の座を勝ち取った選手だと高崎氏。「ハーフのポジションは能力の高い選手がたくさんいる。そこで長く活躍できているのは努力の賜物だと思う」と。

小柄な田中選手の話を受け、ここで平尾氏が、日本代表キャップ数98の最多記録を保持する大野均氏（東芝ブレイブルーパス東京アドバイザー）が試合で一度もボールを触れずして、チー



ムに多大に貢献したという話を紹介。「自分の能力に限定し、ほとんどボールを触らなくてもチームの役に立つことができるのがラグビー」とラグビーの競技特性について語ります。人数も多く、ポジションごとに役割分担が細かく分かれているラグビー。「スクラムハーフであれば、小柄でもパススキルとすばしっこ

さを磨けばいける。子供たちが、自分に合う部分、活かせるものを見つけやすいスポーツと言える」と高崎氏も同調。村上氏も「どんなスポーツをやっていた人も全ての競技経験が活かせる。バスケをやっていた人はステップ、バレーボールは高いボールが取れる」とラグビーは多様性のある良いスポーツであると三人が口を揃えます。

さらに平尾氏はその多様性故に自然と他者に対するリスペクトの気持ちが芽生えると言います。「僕ら（バックの選手）はスクラムを組めない、ラインアウトができない、跳べない。しなくてもいい。そういうのって、自然とフォワードの選手たちへのリスペクトの気持ちが湧いてくる。お前が取らへんかったからスクラム組まなあかんねんぞ、と言われたこともあります（笑）」。同じく現役時代はフルバックだった村上氏曰く「プロップのことをリスペクトしてます。モールって一回組んだらめっちゃめっちゃ疲れるじゃないですか。乳酸溜まって走れなくなるじゃないですか」と。高崎氏はポジションについてこう言います。「この体（小柄）だからスクラムなんて組めない。フルバックは一人だし、ミスしたら目立つじゃないですか。だから僕はフルバックもできない。自分の好きなのところにパスできるから、楽しいからスクラムハーフをやった」と。加えて村上氏が過去の取材経験から、弱視の選手が3年間高校の公式戦に出場していたというエピソードを披露。「チームメイトの声を頼りにスクラムを組むなどのプレイができる、メンバーと助け合いながらプレイができる。他の競技であれば、弱視の人たちでチームを作るのが普通だろうけど、ラグビーではそういうことが可能になる」。ポジションが細かく分かれ、役割も違うことから互いを尊重し合い、助け合いながらプレイができるという、ラグビーというスポーツの特異性、多様性が明らかになりました。

続いて、平尾氏が、激しいコンタクトを要する故敬遠されがちなラグビーをどのようにすればより普及させることができるのか？と問題を提起。コンタクトについて高崎氏が現役時代をこう振り返ります。「元々スクラムハーフで体は小さかったけど、気が強かったので自分でガンガン（コンタクトに）行っていたけど、山口先生によく怒られた。小さい選手は捕まるな、鬼ごっこしろって言われていた。コンタクトすべき人はやればいい、やらなくていい者はやらないように持っていけばいい。ディフェンスはしないといけませんが、アタックは絶対やらないといけなわけじゃない。指導者はそこをちゃんと伝えればいい。当たらなくてもいい選択肢はある。当時、



僕は平尾と組んでいたから、みんな平尾に行くわけじゃないですか。だから平尾を利用しながら自分が生きるみたいなことをしていました」。高崎氏の意見に平尾氏も同調。「そういう風にお互いがリスペクトしていくとレベルが上がって行くし、全部が全部コンタクトスポーツと括ってしまうのは違うと思う。ウィングとかはコンタクトしないでいいステップワークや走力を持てばいい。バックスはボールをキープしてさえすればいい、という考えがあればコンタクトをしなくていい」。実際、近年のラグビースクールでは主体性を重んじ、コンタクトプレーに対しても柔軟に対応していると村上氏。「コンタクトが入ってくるのは主に小学3年生から。ただし、ラグビースクールの中でもコンタクトをしたくない子はタグラグビーをすとか、コンタクトが嫌な子でもやれるように工夫されている。90 チーム以上のラグビースクールを取材して回っている中でほとんどが主体性を重んじている。コーチと保護者が一切口出ししないサイレントリーグも開催されていて、子どもたちだけの声が聞こえてくるなど、かなり現場も変わってきている」。これに高崎氏は、「全て否定から入られて、最後まで残った人間だけが認められるという僕らの現役時代とは違う。今は僕も自己肯定感をどう高めるかという指導をしている」と指導スタイルの変容を語ります。パレーボール界でも、元日本代表の益子直美氏が中心となり監督が怒らない大会なども開催されており、スポーツ界全体が変わってきていると平尾氏。

その一方で、「ラグビーにおけるコンタクトは一つの特性。体をぶつけるからこそわかることがある。接触することで相手の感情や情報量といったやりとりをしている」と平尾氏がコンタクトの重要性を解きます。これに高崎氏も、激しいコンタクトをする選手に憧れていたと吐露。ラグビーの良さの一つとして、体をぶつけ合い、それによる痛みを感じる心が心地よく、それにより相手の気持ちが理解でき、思いやることができるかと高崎氏。コンタクトがあるラグビーというスポーツ。痛みを知ることで、自分の弱さを知り、他者にも優しくなれるとラグビーの魅力、コンタクトの魅力が語られました。

それと同時に、体をしっかり作らないといけない、危ないことから、準備することの大切さを知ると村上氏。さらに「相手をふっ飛ばしたいけど、ふっ飛ばしたら相手が怪我をするから、抱えながらタックルするみたいなのところがある。そこが大事だし、そういう節度がラグビーにはある」と続けます。体づくりも含め、安全なところでのタックル、安全に決められた範囲でのタックルを指導者がきちんと教えないといけないと平尾氏が指導の重要性に言及。

ここからラグビー憲章が掲げる 5 つの価値に話が及びます。ラグビー憲章が伝えるラグビーの 5 つの価値（コアバリュー）は下記。

品位 (INTEGRITY)

情熱 (PASSION)

結束 (SOLIDARITY)

規律 (DISCIPLINE)

尊重 (RESPECT)

先述のタックルの話にもこれら5つ全てが含まれていると村上氏。高崎氏も「味方にとって不利になることがわかると、チームのために安全なタックルをしようとか、勝つために品位のあるプレイをしようという風に自然となってくる。山口先生も勝つことは目標としてあっても、人間教育というのを大事にしている。ラグビーはそういうことを一番伝えやすいスポーツ。ラグビーをやっていて良かったと思う」と言います。これを受け、平尾氏がこう続けます。「昨今スポーツ界では商業主義と勝利至上主義が目につきますが、ラグビーは元々ノーサイド精神があるから、勝ち負けも大事、でもそれより大事なものがあるんじゃないかというのが共有されている。高校ラグビーでも、決勝で同点だと抽選で優勝校を決める。その制度があるからラグビーは保守的なものが守られている気がする」。高崎氏も「2019 ラグビーW杯日本大会でも、ラグビーの精神をメディアも伝えてくれて、何より選手が伝えてくれた。勝ち負けじゃなくて、戦っている姿がそういう精神を表した」と2019 ラグビーW杯が遺したレガシーとして、改めて選手を称えました。

そして話題は「レフリーに対する敬意」へ移行。以前、サッカー指導者から「ラグビーの選手は、なぜレフリーのジャッジに嫌な顔一つせず従うのか？」と問われ、それが縁でレフリーについて講演をしてくれるよう頼まれたという平尾氏。これについて、高崎氏が持論を語ります。

「レフリーも人間だからミスジャッジもする。でも、ゲームをちゃんとさばいてくれるのがレフリーなので、その指示を拒否するということはラグビーを冒涇しているのと同じという風に教えている。終わってから、あれは危ないからなどというやりとりをすることはあっても、試合中は言わない、従うというのがラグビー。レフリーがいないと試合ができない、そこに敬意を示す



べき」。高校ラグビーの指導者の多くは教育者でもあることから、そういった教えが根付いているのではないかと高崎氏は言います。

20時を過ぎた辺りではありますが、今回は参加者からの質問が多いことから、いつもより少し早めに質疑応答へ。Zoom ウェビナーを通していただいた質問、感想の中から順番に三者がコメントをしていきます。

主な質問・感想には下記のようなものが。三者の回答は

SCIX のホームページに「アーカイブ動画」としてアップされていますので、そちらをご視聴下さい。

Haru さん

「来年リーグワンが始まりますが、1月～5月の期間だけで、残りは日本代表の準備と試合期間にあてられているようです。代表候補選手はそれなり年間試合がありますが、多くの選手は6月から12月に公式戦がありません。それでは世界標準に比べかなりのマイナスだと思いますが、リーグワンの試合を秋ごろにもおこなう考えはないのでしょうか？」

日常生活支援ネット 講座さん

「ワールドラグビーがコンタクト練習15分にびっくりしました。
日本でも導入されますか？」

haru さん

「ラグビーの魅力がもっと一般に伝わるためには、陸上競技場ではなく、球技場での試合を増やすべきだと思っています。2019 ワールドカップでも陸上競技場での試合が多く会場では遠すぎたあまり迫力を感じませんでした。球技場の多くがサッカー優先で使われていますが、ラグビーももっと使えるようにならないのでしょうか？」

Yoshiyuki WADA さん

「ラグビー未経験者ですが、お話を伺っているとラグビーをすることが自分自身を知ることにつながるのかなと感じました。身体能力はもちろん、強み・弱みを自覚することで自分の活かし方を無意識にでも考えるようになるのでしょうか。そこで質問ですが、このピンチでラグビーの経験が役に立った（ラグビーに助けられた）という思い出はありますか？」

前川さん

「感想になってしまうのですが、ラグビーを通じて学ぶことの普遍性に改めて感銘を受けました。自分にできないことがあるメンバーに対するリスペクト。まさにこれはダイバーシティですよ。言葉だけではなく多様性を理解すること。まさに社会として必要なことだと思います。痛みがあるからこそ、相手の痛みを知る。お互いに体を預け合うこと。文字通り「協力」ですよ。などなど、素晴らしいスポーツですね。生きる力を学ぶ、これぞスポーツの価値だと痛感しました」

中島さん

「今日はいつもよりも本音トーク全開で、心配になりましたが…大丈夫ですか？（笑）」

私は柔道を高校までやっていて、友人の助言で大学からラグビーを始めた者です。助言とは、ラグビーの話がしたいだけ、というものでしたが、そのおかげで本当に今、より良く生きていると思っているものです。その経験から、個人競技で出る力と、団体競技（皆のために！）で出せる力は違うと思っています。これは柔道出身のプロップだから、ですか？ボックスの皆様にお聞きしたいです。私はラグビーの真髄は、コレクトネス（正しさ）ではなくフェアネス、だと思っています」

今回もたくさんの質問、感想をお寄せいただきありがとうございました。

最後に、総括として、高崎氏、村上氏から、それぞれ一言ずついただきました。

「今はラグビーから離れているので、こんな風にラグビーの話ができて楽しかった。今の学校（京都市立京都奏和高等学校）は不登校の子どもなどを集めている学校。ある意味ラグビーに似ている。凸凹した子たちのピースを合わせると一つのものになる。ラグビーに繋がる。今日は私も勉強になりました」と高崎氏。「カッカするシーンがある中で我慢ができる。自分の気持ちをコントロールする訓練ができる。お子さんがまだ何もスポーツやっていないならラグビーを勧めたい」と村上氏。11月には新刊が発売されるとの告知もありました。講師のお二人、そして司会を務めていただいた平尾氏、この場で改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

さて、視聴者の皆さまに楽しんでいただきました「第15回 SCIX スポーツ・インテリジェンス講座」も、本年度はこれを持ちまして全3回が終了となります。今回は、この夏にコロナ禍の中で「東京2020オリンピック・パラリンピック」が開催されたことや、日本のトップカテゴリーの社会人ラグビーが新リーグ「LEAGUE ONE」をスタートさせる、といった話題もあり、ここでもう一度「スポーツの価値とはなにかを、

再考してみよう」ということをテーマにお送りしました。スポーツを愛好する皆さんには、やや学問的で難しいテーマであったかとも思いますが、スポーツを「する・見る・支える」の中に、もう一つ「考える」ということがあることに気づいていただけたら、主催者としては幸いです。

来年は「第16回 SCIX スポーツ・インテリジェンス講座」として、また新たなテーマで皆さんにお目にかかれることを楽しみに、本年度の「講座」は終了とさせていただきます。誠にありが



ありがとうございました。来年度も引き続きたくさんの方のご参加お待ちしております。

以上

(レポート 中野里美)

スポーツ振興くじ助成事業

